

遠 雷

有 森 信 二

激しい稲妻が、飛沫をあげて西の空を裂いた。

音はない。黄緑色の塊が突然中空に現れ、次の瞬間には袈裟掛けに闇を切り裂いていく。

君は、西側に一つだけ開いたアパートの窓から、空を見ている。

そして、光のことばにじつと聴き耳をたてている。音はないけれど、君には百五十メートル先の電柱の傾き具合や、二百メートル先の屋根の色や形で、光のことばがわかるのだ。

あれから二十年経った。その間、君はいつも机に頬杖を突き、西の空を眺めてきた。頬杖を突いてぼんやり空を眺めることが、君にとって一番ふさわしい方法だと思えたからだ。

君はもう四十三歳になる。勤めていれば、課長の口でもかかろうかという歳だ。それとも、あのまま教室に残っていたら、博士号ぐらいとつているかもしれない。だとすると、外国留学の一度や二度はして箔をつけ、ワイヤレスマイクを片手に教壇をのし歩いている頃だ。

しかし君は、志望のA新聞社にも、S商事にも入社しなかった。教室にも残らなかった。いまでこそ、やっと市内の予備校の非常勤講師として、週に二回出勤するようになったが、生活の大半はケイの稼ぎに頼っている。ケイ―覚えていいるだろう、あのそばかすだらけの看護婦見習いだった子だ。

結局、君がこの二十年でなしたことといったら、ケイとの間に、やっぱりそばかすだらけの女の子を一人儲けたことと、光のことばを覚えたことだけだ。

君は二十年間というもの、一日中黙り込んで机に頬杖を突き、西の空を眺めていた。はじめ、足元に転がって哺乳瓶をしゃぶっていたジュン（君とケイとの間に出来た子だ）が、いつの間にか膨らみ始めた胸を君の鼻先に突き出し、居眠りばかりしてるのかと思ったら、たまには目玉の動いてるときもあるじゃない、と生意気なことをいうようになった。

実際君は、窓の外に広がる四角の空に向かい、薄目を開けたままぼんやりしているのだったが、一応は原稿用紙を広げ、研いだけばかりの鉛筆を二十本もそろえていた。

が、ケイもジュンも、君が原稿用紙を埋めている場面は一度も見ることがなく、君が光のことばを秘かに書きとめようとしていることなど、誰も知らない。それもそうで、殆どの時間、君は机に突っ

伏して眠っているばかりだったから、涎に濡れとおった原稿用紙が、日に五、六枚ずつ反古になるほかには用紙の嵩の減る様子もなく、鉛筆にしても、誤って足元に落としたときに芯の折れた分を丹念に削り直すだけだから、こちらもいつまで経っても一向に減らないだった。

ケイは、一時、君が本当に異常をきたしているのではないかと疑っていたが、これといって埒のあかないことをいうでもなく、誰かに危害を加えるそぶりをみせるでもないもので、いつも靄のかかった顔のまま、一人でうっとおしいほどに部屋を占拠している君の存在にも、自然とあきらめがついたらしい。

二十年経つたいま、〈ぼく〉はまだ二十二歳と七か月と十六日のままだ。〈君〉が満二十三歳と一日目だったあの日の、あのときのままだからだ。あの日、〈ぼく〉は時間というものの流れをすり抜け、ひよいと向こう岸に降り立った。

それは、百円ライターを一度鳴らすよりも簡単な、いとまたやすい方法でだった。

あの日、というより正確にいえばあの日の前日、ということになる。あの日の前日は、君の二十三回目の誕生日だった。飲み始めたのは七時頃だった。

君は、しきりにケイのことを自慢した。ケイの家は貧しくてねえ。そのくせ兄弟は六人もいる。ケイは長女でね、彼女の能力からしたら県立高校などたやすいところだ。しかし、下には乳飲み子まで入れてまだ五人もいる。彼女は中学を卒業すると、働きながら看護学校に通った。働いた金をきりつめ、家に仕送りを続けながらね。

そういういながら、百年も続いているという老舗の着物問屋の一人息子である君は、声をうるませた。

俺は、ケイのような女に初めて出会った。彼女の強固な精神にはいつも脱帽させられるよ。絶対、妥協を許さないからな。俺たちがいい加減に日和ろうとしていると、それでも闘士なの、とくる。やっぱり育ちだねえ。育ちというのは、大切なもんだねえ。

なんの苦勞らしい苦勞も知らずに育った、ということが唯一の汚点であると思いつめていた君の、それは偽らざることばだった。皮肉なことに、君のその育ちの良さからくる鷹揚さのために、学内で最も過激な活動をしていたT派にオルグされ、感激のあまり君はその場で加入した。

君は有頂天だった。父親とけんかをし、家をとび出し、西日だけが射し込むアパートに転がり込んだ。そこは、たちまちT派のアジトになった。日当たりの悪さだけを除けば、二DKという広さは学

生の身には十分過ぎた。

君の育ちの良さは、そこら中に顔を出していた。それでも君は、十分闘士だった。とび出した家に度々しのび込んで、T派の活動資金をもち出した。勿論、その活動資金は、二DKに棲みついた連中の胃の腑に、たちどころに収まってしまっただけであつたが。

街頭にも出た。カンパにも立った。団交で徹夜もした。バリケードにも棲んだ。H派やG派の連中と、角材でわたりあつた。

飲み始めたのは七時頃だったが、H派の連中の動きがどうもねえといつて、君は一度バリケードを覗きにいった。しかし、すぐなにごとでもなさそうに笑いながら戻ってきた。あまり嬉しそうなので、どうした、とぼくは訊いたほどだ。君は、あとでケイと会う約束をしてきた、といつて片目をつむってみせた。

君は、店の主人に、ボトルを一本分けてくれといつた。ケイに会うまでにまだ時間があるから、もう少し場所を変えて飲もうと、店を出たあとぼくにいった。

もう一軒入つてもよいがとポケットを探っていた君は、舌を出して、しようがねえこれっぽっちや駄目だ、とぼくの顔を覗き込んだ。ぼくも自分のポケットを探ってみたが、硬貨が二、三枚指に触れただけだった。

しかたがないな、と笑い合いながら、君はぼくの部屋にこういう、といった。君のアパートまで十五分、ぼくの部屋まで五分という距離だったから、自然にそうなつた。ぼくは、六畳一間に弟と二人で住んでいたが、弟はクラブの合宿で帰らない筈だった。

ぼくたちは、最初の店で議論を始めた三角形の定理について、議論を再開した。

三角形の定理というのは、底辺が大きければ大きいほど三角形は安定するが、無限大に底辺が大きくなると、頂点までも底辺に吸収されてしまうというやつだ。

君は、頂点が底辺に吸収される過程が革命であり、君たちが唯一よりどころにしている論理がこれだ、と得意そうにいった。つまり、現在の帝国主義社会(君のことを借りれば)を三角形Xとすれば、そのXの内懐に君たちの党(これも君のことを借りれば)である三角形Yを放りこみ、Xの脂ぎつた肉をYが食い千切り、終にはYがXを完膚なきまでに叩きのめす、というのだった。

そして、YがXを叩きのめしたあとは徐々に底辺部を拡大し、いずれは頂点部を呑み込んでしまい、その時点で三角形Yは消滅する、というシナリオだ。

ぼくは笑つた。このボトルなかなかいけるよ、とボトルの形を誉

めた。ボトルはどうひっくり返してみても、円形に近かったのだ。事実、味も極上だった。

ぼくはいった。三角形のボトルてのはどうして見ないのかねえ。これは、上質のギャグだった。君は腹を叩いて笑った。三角形XとYだけならいとしても、三角形Zや、それよりも質の悪い三角形αやβまで出現して、XやYを叩きのめしたあと、より鋭角な本質をむき出しにしたらどうなるだろう。いやいや、もう一つ質の悪い逆三角形γなんてのが出現したら、こりゃあ愉快だ。

群雄割拠だ、と君は上機嫌になり、耳の穴をほじくりながら笑った。そして、おもむろに腕時計を覗いた。まだ、三十分もあらあ。君は下唇のあたりに少しみだらな色を溜め、ケイはな、驚くなよケイはな、処女だったんだぞ、とその日だけで七回目の同じセリフを吐いた。

その日―そう、あの日がもうすぐそこに手が届くというところまでやってきていた―の夜は、殊の外静かだった。

部屋から出て、十部屋分ばかりの廊下を歩いていかねばならないトイレに立ったとき、目のあたりに鋭い稲妻が走った。稲妻は飛沫を散らし、音もなく続けざまに走った。ぼくは、目の高さの開いた窓の向こうにあばき出される風景の一つ一つを、酔いの澱んだ頭の隅に、なぜかはつきり刻みつけている。

その風景の形、色。蹲り、息を止めてしまったまま固まり、乾き始めた世界。

冷や汗でしかない水滴が腋の下にじっとり流れ出てくるのを、Tシャツの裾をまくって拭いた。トイレのドアを開け、廊下に出た途端、今度はむつとする生温かさが首筋にからみついてきた。

九月十九日。そうだった。その日は九月十九日だったのだ。どこかの部屋でラーメンを煮る匂いが、廊下伝いに強く流れていた。

部屋のノブを引いた。部屋は真暗だった。おい、とぼくは声をかけた。君は、トイレに立ったぼくのいないほんのわずかの隙に、部屋の電気を消したり、コップの水割りをお湯割りに替えていたり、こたつの下にもぐり込んでいたり、よくいたはずらをしたものだ。君は、本当に育ちのいいぼうやなのだから。

おい、とぼくはもう一度呼んで壁のスイッチを押そうとした。その瞬間、稲妻が真昼の明るさで、部屋の隅々まで照らし出した。と同時に、ぼくの足指にぬるりとしたものが触れた。冗談はよせよ、とぼくはいった。それは、実にバカバカしい、大仰な演技だったからだ。

部屋の中央に、顔面から血を噴き出し、死んだふりをしている君の姿があった。机の上の原稿用紙は散らされ、コップも丁寧に転が

され、半分以上中身の残っていた筈のボトルまで倒されて、まだいくらかの雫をテーブルから畳にこぼしていた。冗談もいい加減にしろ。ぼくはゆっくりと素晴らしい、スイッチを押した。

そのとき、ぼくの脳天に激しい火花が散り、ぼくはすうつとどこかへ落ちていった。

君が〈ぼく〉であったとき、という表現はやっぱりおかしいし、ぼくが〈君〉であったときというのもしっくりいかない。

君は君である筈だし、ぼくは結局ぼくであるからだ。

気がついたとき、ぼくはまだぼくだった。

ケイが、血走った目でぼくを見下ろしていた。気がついたとわかると、ケイは顔中を雪崩みたいにして、ぼくの手にしがみついてきた。そして、よかった、よかったあといいながら、〈君〉の名を何度も呼んだ。

ケイは、自分の興奮が収まってくると一度深呼吸をし、驚かないでね、といった。そして、三日前に〈ぼく〉が死んだ、といった。一瞬、ぼく自身がそうだったのか、と納得してしまうほどケイの声は静かだった。三日前に、〈君〉は頭部を数回殴られたものの、運よく急所をはずれたために助かり、〈ぼく〉は顔面を一撃され数時間後に死んだのだそうだ。

そういわれてみると、そのような気がしないでもない。死んだのがぼくで、あのぼくの部屋で先に転がっていた君の方が、息を吹き返したのだと。

ぼくは、いや、ぼくではなくなった〈君〉は、おそろおそろ手を上げ、頭に指を運んだ。頭は、目玉の部分だけを残して、ミイラみたいに包帯が巻かれていた。痛みはそれほどなかったが、頭の芯が奇妙に火照っていた。飲み過ぎて畳にひっくり返ったときに感じるのに似た天井が回るあの不快感と、腹の底にどろりと堆積した重苦しい嘔吐感とが、体全体を包んでいた。

次に気がついたときは朝だった。ケイは、最初のとときと同じ血走った目で、ぼくを見詰めていた。うっ、とぼくがうなると、ケイは頬をすり寄せ、〈君〉の名を声高に呼んだ。ケイの汗の匂いがかすかに漂い、ケイの体温がぼくの露出した首筋や肩や胸にじかに伝わってきた。

ケイはいった。〈ぼく〉の顔は目をそむけたくなるほど無残に碎かれ、病院に担ぎ込まれたときには、裂けた眼窩や鼻腔からは、もう流れ出る血もなかったのだと。

しかし、それから二時間も生き延び、結局手の施しようのないまま息絶えてしまったのだそうだ。ぼくは両親を失っているため、身

寄りといったら高校生の弟だけしかないのであるが、その弟でさえも、〈ぼく〉の潰された顔には顔を背ける始末だったという。

わたしがいなかったら、とケイはいった。ケイがいなかったら、どちらが君で、どちらがぼくであるかわからなかったという。君もぼくも頭部を傷めているため、顔では識別がつかず、おまけに背格好も血液型も同じだったのだ。

結局、決め手となったのは、着衣と、着衣のネームと、背中の手術跡だ、という。

つまり、〈ぼく〉である顔面をつぶされた男が着ていたのがたまたご色のTシャツで、シャツには「マダ」という洗濯ネームがあったのだそうだ。「マダ」はぼくの名前である「島田」に違いないし、それに一方の白いシャツの男の背中には、右肺のうしろあたりに腫物を切開した跡があるという。

それらはすべてケイの証言によるもので、一番動かない証拠となったのが、背中の手術跡だそうだ。

ケイは、背中の手術跡は何度も見ているし、ほら一度、なんの手術跡かしら、と聞いたことがあるから間違いないじゃない、と聞いた。そのケイの自信に満ちたことばには、君とケイとのことがこつて塗り込められているようで、鼻のあたりがくすぐったかった。

しかし、とぼくは思った。あの日二人が着ていたのは、君がたまたご色でぼくが白のTシャツだった。

はつきりいえるのは、弟と二人だけのぼくには、Tシャツをクリーニングに出す余裕などないということだ。たまたご色のTシャツに、どうして「マダ」というネームがついていたかなどわからないが、ぼくの背中の手術跡は、小さい頃弟と相撲をしていて、勝ったはずみで反対に転がり、そのとき岩角にうちつけた怪我の跡なのだ。

かわいそうなのは弟だ。振ればカラカラ鳴る素焼の壺を抱え、誰もいない田舎の家に帰った。〈ぼく〉の骨壺を、せめて両親の眠る同じ墓地に納めようと思ったのだ。

兄弟二人そろっていてもこのころもとなさに変わりはないが、一人になってしまうと、弟はすっかり寡黙になった。

それもそうだ。部屋は、ぼくと君の流した夥しい血が、畳や壁や襖に散り、九月の熱気に饅え、瘴気のような影絵を作り出していた。目鼻を弾く異臭のただ中にぼつねんと座り、ぼくと君とが呻き声すらもたてずに転がっていたというドア近くを、弟はぼんやり見詰めて暮らした。

飯らしい飯を食わなかった。食わなかったというより、食えなかった。それまで、ぼくのアルバイトでなんとか食っていたからだ。

弟は、勉強もやめた。悪くなかった成績もジリジリ下がりと、とうとう学校にも出なくなつた。いつの間にか、髪は肩まで伸びた。閉めきつた部屋の窓ガラスに、ケヤキかカエデかの落葉が、二枚ばかりこびりついていた頃だ。

机の上の貯金箱が、振つても風の音しかしなくなったのを見届けると、部屋を出た。家賃を三か月分溜め、ぼくの机や本箱や、君があの日持ち込んだ、底に三センチばかり液体の入った例のボトルを残したまま。

住み込み可、という貼り紙のあるパチンコ屋にとび込んだ。部屋を出て、最初に目についたのがその貼り紙だったからだ。店の中には、ボリユームいっぱいの演歌が流れていたが、耳をくすぐるほどの空調の落ち着いた音も巡っていて、ぎくしゃくした点滅に慣れた脳細胞には心地よかつた。

薄氷が張るほどに冷え込んだ朝、弟は最初の給料で中古のオートバイを買った。働き始めてから、徐々にイメージを膨らませてきた計画の第一番にすることが、以前から目をつけていた、このオートバイを手に入れることだった。

二百五十CCのオートバイを、計画どおり、ほんの一部手付金を入れただけで手にすると、寿司屋に入った。

にぎりを二人前食い、ビールを三本飲んだ。残りの金で、オートバイの券を買った。レースの結果は、スタートのときから目に見えていた。はずれ券は溝に捨て、唾を吐いた。第二番の計画も、予定どおりだった。

レース場を出ようとしたところで、チンピラ風の男たちに囲まれた。肩が触れた挙げ句、ガンをつけた、とすごまれ、体が吹き飛ばすほど殴られた。これは計画にはないことであつたが、下半身が浮き立つほどの酔いのなかで人込みを泳いでいたため、反対にしびれるほど心地がよかつた。

チンピラたちが去つたあと、なにかの金具にすがつて立ちあがると、息が詰まりそうになるほどあばら骨が痛んだ。目尻が切れ、鼻血が流れ、顔は焼けたみたいに熱かつた。

弟は、オートバイに這いあがろうとした。が、這いあがつたと思つたら、ひっくり返つた。足がうまく踏ん張れないのだった。足指のどこかが折れているらしかつた。それでも何度目かにやっと這いあがると、いきなりエンジンを全開にして街中に突っ込んでいった。

五つ目の赤信号にかかつたところで、二台の白バイが追いかけてきた。弟はありつたけの力でアクセルをふかし、対向車線にまで入り込んで、逃げた。追跡にはパトカーも加わつた。弟は無免許の上、オートバイに乗るのは初めてだった。それでも市街地を抜け、右手に海の見える国道を突っ走つた。白バイとパトカーがマイクをボリ

ユーム一杯にあげ、サイレンを鳴らして迫った。急カーブの下は絶壁だった。絶壁には潮風が吹きつけ、高い波が道路すれすれまでかけのぼっていた。

そのガードレールを突き抜け、一台の白バイが真逆さまに波の中に転落していった。二台目の白バイは、かろうじて急停車した。パトカーの数が、いつの間にか数台になっていった。

弟のオートバイは、それ以来どこからも発見されない。

弟が姿を消したあとのぼくの部屋は、殆ど間をおかずに建具が入れ替えられ、ぼくたちのことをなにも知らない女子学生が、レースのカーテンをかけ、ダブルベッドに鏡台を持ち込み、冷蔵庫やレンジまで買い込んで、スイートルームにしてしまった。

ぼくは、〈君〉になった。

それは、ぼくの知らないところですべてが運ばれ、決められてしまったのだった。ケイの雪崩みたいに崩れる顔を間近に見、息を吹き返した筈のぼくは、二十二歳と七か月と十六日目のままで骨壺となり、死んだ筈の君は、二十三歳と一日目の続きの命を吹き返し、また時間の流れの端を歩き始めることになった。

しかし、〈君〉になってしまったぼくには、その瞬間から、あたりのすべてが、うす墨がかかったみたいにか見えなくなってしまう。

ケイはしつかり者だ。君が入院していた間も、退院して二DKのアパートに落ち着いて(アジトの連中はケイが追い出してしまった)からも、ケイはきちんと看護学校に通い、弟妹たちへの仕送りを欠かさなかった。

包帯をとると、君の顔は以前の顔ではなかった。いや、以前の誰の顔でもなかった。

しかし、ケイは満足そうだった。科学の進歩ってたいしたものね、と医療の技術を誉めた。この病院は、こういう部門では最高のレベルなのだから、ともいった。そして、あとはあなたの気持さえ晴れてくれればいいことないわ、と嬉しそうに君の手を包み込んできた。

君の両親、すなわち着物問屋の二人は、病院にも二DKのアパートにも度々やってきた。勿論、君が意識をとり戻すまでも彼らは何度もやってきたそうで、枕元には、花が置かれ、見舞品が積み上げられていた。

しかし君は、二人と会うのがひどくおっくうだった。実際、なにをどうしやべっていいのかわからなかったし、ただでさえ頭の芯に鈍い痛みが残っており、他人の声を耳にするだけで憂鬱になった。

君の父親が、これまで幾度となく君と口論した、と悔いていると



きに、君は全身の肌が粟立つほどの不快を覚え、無意識のうちに父親の手を払い除けていた。だが、気まずそうに照れたのは父親の方で、急所をはずれたとはいえ、なにしろ打ちどころが打ちどころですからねえ、と汗を拭き拭き、ケイに謝るのだった。

君は、そんな父親が嫌いではなかった。親というもののものいい方や、手の温もりとはこういうものか、と妙なところに感心した。

母親の方は、いつもしめっぽかった。どうお、もう家に戻ってきてもよくはないの。怪我の方は、立派な先生におまかせしているけれど、退院したあとはやっぱり家の方がいいと思うし、お母さんもお父さんも、もうあなたに跡を継いで欲しいなんていわないから、とハンカチで目頭を押さえるのだ。

つまり、母親というものは、こんなふうには息子の前で泣くことで、自分の主張をしたたかに押し通そうとするのだな、とこれも君にとつて新しい発見の一つだった。

面白いことには、母親とケイとはどうもソリが合わないようで、母親がいつまでも君にまつわりついていると、あまり刺激すると体にさわりますから、と看護婦見習いの立場を發揮して、居丈高にいうのだ。

反対に、君がケイに用を頼むと、母親は眉間を吊りあげ、悔しそうに唇を震わせ、そんなことぐらいどうしてお母さんにいつてくれないの、と声を詰まらせる。

すっかり変わってしまったね。君が包帯をはずした日、母親はなにかを嗅ぎ当てでもしたかのように、君をしげしげと見た。いやあ、俺より男前になっちゃった、と父親がいわなかったら、母親は、餌にありついた犬の真似を、一時間でも二時間でも続けていたかもしれない。

そのときケイは、傷は頭部ばかりか顔面にもかなり及んでいましたから、ある程度はやむを得ないので、ときっぱりいった。君は、ケイ自身、一番君を疑っているふしがあると思っていたから、このケイの態度は意外だった。

怪我のショックで、いま精神的にいくらかダメージがあります。けれども、必ず快復する程度のもんです。ですから、もうしばらくそっとしておいていただけませんか。

ケイは両親にそう説明し、本人が希望していますからアパートの方で様子をみることにします、と主治医みたいにいい放った。

君は、自分の症状について、主治医とケイがカーテンの陰で話しているのをこっそり聞いたことがある。

たんなる外傷だから、後遺症はまず考えられないと思うな。主治医は、いとも簡単そうにいった。本当に大丈夫ですか、とケイは三度も念を押したが、傷口がふさがってしまったら完治も同然だ。そ

うい残し、主治医は足早に部屋を出ていった。

退院して君が一番最初にしたことは、田舎のぼくの墓地を訪れたことだ。

あたりはもう冬枯れていて、誰一人訪れる者のない墓地には、海からの風がうなりをあげて吹き渡っていた。君は首をすぼめ、刺し込んでくる寒さから傷跡を守るため、二枚のマフラーを重ね、足を引きずる度にカサコソ鳴る草道を、菩提寺の和尚と二人で墓石をかき分けて歩いた。

短い読経のあと、君は、蒼いみかげ石の底から〈ぼく〉の骨壺をとり出した。骨壺は、ほんのり温かみを溜めた穴の底から、凍えわたった地上に現れ、身震いに似た微かな音をたてた。

君は、その骨壺を耳に当てた。耳に当てたまま、しばらく壺を鳴らす風の音を聞いた。それだけの儀式だった。

骨壺は再び、凍えすさんだ地上から、ふつくらした湿りを帯びた穴の底に、ゆつくりと下りていった。ただ、穴の底に下り、君の手を離れようとしたとき、もう一度君の指先で小さく鳴った。しかし、吹きあげてくる潮風が、瞬く間に指先の音をひきはがし、鉛色の空にまき散らしてしまった。

君は蓋を閉じる前に、〈ぼく〉や両親の骨壺の隣に、やつぱり弟のものも並べなくてはと思ったが、弟はこんな狭苦しいところには沈められたくないのかもしれないと思い直し、蓋を閉じた。

弟の行方は、依然知れない。

ぼくの郷里に行くことは、かなり前からケイにも話していたが、ケイは気が進まないふうだった。だって、あの死に顔を私が見て、そして証言した人でしよう。思い出したくないわ。なんだか私のせいである人、命を落としたみたいだし、といわれれば君も納得せざるを得なかった。

退院したばかりの君に、ケイは大学に戻るようにはいわなかった。襲撃の恐れがあるから外出はひかえた方がいい、ともいわなかった。ただ、戸締まりだけはキチンとして、といった。

彼女は、玄関に近い四畳半を自分の部屋にして、西側の君の部屋である六畳間との間の襖を必ず閉ざして眠り、朝は君が目覚めないうちに朝食と昼食の準備をし、出かけていった。

ケイの帰りは遅かった。毎晩十時になったり、十一時になったりした。昼は看護婦の見習いをしながら、夜の看護学校に通っているのだった。

帰りには、消毒液の匂いと一緒に、大根や人参の入ったビニール袋を下げてきた。

夕食の間、君とケイは殆どしゃべらなかつた。君はなにを話して

いいのかわからなかったし、ケイの方は、話の糸口一つ掴もうとしないのではないかとさえ思われた。

食事が終わると、ケイはさっさと立って洗い物にかかった。もう、十二時近くになっていいる。ときどきケイは、早くあなたの気持が晴れてくれればいいんだけど、と背を向けたまま水音の中で、妙に弾んだ声でいうのだった。

そんなとき君は、いつの間にか澱んだ頭の中に、無数の三角形を描いていた。

三角形X、三角形Y、三角形 $\alpha$ 、三角形 $\beta$ それらが伸びたり縮んだり、あるいは広がったり閉じたりしながら、三角形はどこまでも鋭角的であろうとした。

彼らは、同じ三角形を見かけると、必ず相手に挑みかからずにはいない。大きいものは小さいものを手玉にとろうとし、小さいものは大きいものの内懐に食らいつこうとする。そして、数えきれないほどの三角形が、それぞれの無数の刃を四方八方に伸ばし、切り結んでいる。

君が君であったり、ケイがケイであったりすること自体が幻影に過ぎないのかもしれない、と君は思う。君が君であるためには、二十二歳と七か月と十六日のぼくの骨壺が必要なのだし、ケイにとつてすべては、あらかじめ精妙にこしらえられたゲームに、ふと足を踏み入れたことから始まった、といつてよい。

君は、机に頬杖を突いて座り、空を眺めていることが多くなった。いつも頭の芯のどこかで虫が鳴いていて、帽子を目深に被ったみたいになうとおしかった。

それは空気が圧縮されていくときの音のようだったりが、じつと目をつむっていると、小さな振動となって、やがて瞼のあたりへ抜けていくのだった。その振動にゆっくり体をまかせている時間は、決して不快ではなかった。

慣れたのかもしれない。

君はぼくのことを思った。二十二歳と七か月と十六日のまま、みかげ石の下に封じ込めてしまった〈ぼく〉のことを思った。そんなとき、骨壺の中の〈ぼく〉は、あいかわらず三角形の定理について議論を挑んできた。

〈ぼく〉は、二十二歳と七か月と十六日の壁の真下に佇み、いずこへも動かぬ構えでいるから、この問題に執拗にこだわっていられるのかもしれない。しかもそれは、壁のこちら側で生きている君をおびやかすには格好の手法であった。〈ぼく〉が君の前に現れるということ自体が、君の精神を揺らし、傷つけ、疲れさせずには

おかないのだった。

あまつさえ〈ぼく〉は気が向くと、君の髪を引っぱったり、君の背中に息を吹きかけてみたり、退屈すると隣の部屋で眠っているケイの胸元にそつと指をしのばせたりした。

〈ぼく〉は、ぼく自身である〈君〉にまつわっていることがなによりの悦びであったし、君だけが〈ぼく〉がかつて生きたということの証であったのだ。

だが、君はだんだんと変わった。風化を始めたのだ。はちきれんばかりに赤みを帯びていた頬は青白くこけ、皮膚はたるみ、髪もいく分白くなった。

時間の法則に作用されているからだ。〈ぼく〉はそんな君を見るにつれ、だんだん議論をけしかける意欲も薄れ、君にまつわりつく気分も萎えてきた。

〈ぼく〉は、いつまで経っても時間の法則を越えた、二十二歳と七か月と十六日のままであるのだったから。

君は三度家を出た。君が君であることに耐えられなくなったときだ。

一度目のときは、弟のことが頭のすべてを占めていた。足を引きずり歩きながら、弟が消えたという海辺にたどり着いた。海は風いでいた。青みどろみたいにとろりとした水の底に、弟がのんびりうたた寝をしているのではないかと思った。

君は目ぼしをつけ、小石を一つ放り込んだ。弟の心に、まだ時間の流れの中に戻りたいという気持がいくらかでも残っているとしたら、その波紋で目を覚ますかもしれないという気がしたからだ。しかし、青みどろは、いつまでも静まったままだった。

海辺には一時間ほどいて、君は戻ってきた。二度目のときは、ケイといさかいをしたときだ。外は木枯らしだった。

君は、頭の高傷を押しつけてくる乱れた鼓動の音を聞きながら、歯を鳴らしていた。体中が熱っぽく、ひどい吐き気がした。

ケイは、消毒液の匂いをまとって帰ってくるなり、医者にいけといった。君は、たいしたことはないし、もしひどくなるならひどくなくて、そのままくたばってしまった方がいいのだといった。ケイは、あんたは昔の自分（ケイの頭には、ひよつとしたら、あの君のことが浮かんでいたのかもしれない）を忘れたの。わがままで、おおらかで、途方もない野心家だった自分を忘れたの、といつにない叫びをあげながら、君の真青の顔を見据え、急いで病院のダイヤルを回し始めた。

君は、ケイの手の受話器を奪うと床に叩きつけ、俺なんかどうで

もいい。どうでもいいに決まってる。実際、馬鹿馬鹿しいっただらな  
い。ほら、お前の顔にもそう書いてある。と支離滅裂なことばでわ  
めき、ふらつく足で粉雪の舞う路地に出た。

そのまま君は、二日間姿をくらました。結局、三日目の朝、駅の  
ホームで眠り込んでいるところを保護されたのだった。

三度目は、雷の日だった。朝から降りそうで降らなかった夏の夕  
暮だった。いきなり、君の鼻先に稲妻が走った。たて続けに、五本  
も十本も走った。

「ぼくである〈君〉は、あの日のぼくの部屋の入口に君である〈ぼ  
く〉と二人、血を噴きながら倒れていた。部屋の隅にはグラスの破  
片が散り、その破片をおびたらしい血の堆積が押し流そうとしてい  
た。」

その光景の中からよろめき立った君は、足をひきずり、耳をおお  
い、頭をかかえ駆け出した。稲妻の手から、一步でも遠く離れよう  
として。

気が付いたとき、君は知らない町の橋の欄干にしがみついていた。  
知らせを受けて、君の両親とケイが、タクシーを一時時間も乗り継い  
で迎えにきた。

君とケイの間には、二十年経つたいまもあいかわらずうすい靄が  
かかっている。君は殆どしやべらなかつたし、あなたの気持が早く  
晴れてくれればいいのに、というのがケイの口癖である。

ケイは、消毒液にまぶされた体で、大根や人参の入ったビニール  
袋を下げ、夕方早い時間に帰ってきた。数年前から、夜勤のない近  
所の病院に勤め始めたからだ。

不思議なことに、ケイは二十年前もいまも、全く歳をとるのを忘  
れているのかと思うほど変わらない。これは、君のケイに対する記  
憶自体がおぼろげなことにもよるが、ときどきアパートを訪ねてく  
るケイの友人の同年輩の女性と比べても、明らかに若い。

友人たちは、地球人かしらねえこの人、とあきれ顔でいう。そん  
なとき君は、三角形の定理を思い出し、稲妻の白さを思い出し、二  
十二歳と七か月と十六日の壁の真下で、ひとりだんまりを決め込ん  
だ〈ぼく〉のことを思い出す。ひよつとしたら、ケイもあのととき時  
間の流れをすり抜け、二十二歳と七か月と十六日の壁の真下に降り  
立ってしまったのかもしれない。

ジュンは十九歳だから、短大一年生だ。背はケイより高く、胸の  
膨らみなど、すっかり一人前である。スカートはひきずるほど長く、  
アフロヘアーで、爪は緑色に塗り、二箱も煙草を吸う。

週に三、四日アパートに帰ってこないことなど、ざらである。  
そのくせ、一日中部屋にこもっているときがある。君は二十年の

間、ずっとこもっているのであるからこの道では先輩であるが、二つしかない部屋に、君と、この頃とみに女らしさを増してきたジュンとでこもっている、息苦しくなる。

ジュンは眠る。二、三日家を空けたあとは、いま死ぬんだからといい残り、眠る。そして、夕方近くに目が覚めると、チッキショールと叫びながらコップや茶碗を投げつけ、ガスの栓を開き、気に入り、腕をハサミで切り裂いたりする。挙句に、バツカヤローと壁に体をうちつけ、ありったけの力で部屋を揺すりだす。

君は、机に頬杖を突き、西の空の雲の色を眺めたり、指に唾をつけて風の向きをはかったりしながらぼんやりしているのであるが、隣の部屋が揺れだすと、椅子から腰を浮かし、部屋中を歩きまわっている。しかし、襖を開けて飛び込んでいっても埒のあかないことは知っている。

なんだよお、その目はよお、ただ飯食らいのクソ親父がよお、生きてる人間の目えかよお、毎日毎日辛気くさい面でおーっとしててよお、とジュンがいきりたつ。どうかすると、そんなお前の娘がどんな目にあっているのか知ってるのかよお、とすぐんでくる。

君は、お前の娘が、ということばに胸を刺される。君が君になつてから、半年目に生まれたジュンが、だんだん君から遠ざかっていく存在に思われるからだ。もつとも君自身、手術のあとは考えられもしなかった顔の君になっているのであるが、この頃のジュンの顔立ち、もともとの君の面影をどこにも伝えていないのではないかと思えてならない。

その点、さすがにケイは並の地球人ではない。荒れているジュンをピシリとうちすえると、相手がなおもとびかかってこようと身構えていようが、脱走をしようともがいていようが、鋭いことばを投げつける。

お父さんもお母さんも一度死んだ人間だから、なんにも恐くないよ。あんたもかわいそうだけど、そんな二人の間に生まれてきたんだ。恨むならお恨み。だけど、自分は自分でしかないんだ。ケイは、消毒液の匂いを洗濯籠に放り込みながら、ジュンとそっくりのそばかすの浮き出た頬をわずかに火照らせていう。

君は、光のことばを知っている。光は、秒速三十万キロメートルという速さで時間と空間を貫き、ひたすら駆けている。

光は生きているのだ。

だから、光にも機嫌の良いときや悪いときがある。光はそのときどきの思いをことばに託し、走り抜ける。

二十年前のあの日の、あのとときの光のことばは、実に陰鬱だった。訳すると、〈虚〉となった。君の経験からいうと、概して光が白に

近いときは機嫌の悪いときで、オレンジ色に近いときは機嫌の良いときだ。

週に二回、予備校の教壇に立つようになって、忘れかけていた表情が君にいくらか戻ってきた。

二十年の間に、生徒たちの服装はカラフルになり、清潔になっていた。君にとって意外だったのは、生徒たちが依怙地なくらいに従順で、我をはらず、軽いジョークを巧みにしゃべることだった。彼らは明るかった。殆どといっていいくらい、むさくるしく髪や髭を伸ばした者はいなかったし、ひねくれた論陣をはってくる者もいなかった。

しかし、つい二、三日前まで教室や廊下ではしゃいでいた生徒が、突然顔を見せなくなったりした。その生徒は成績も決して悪くなく、家庭的にも全く申し分がないと思えるのであったが。

一緒に笑い合っていた連中に理由を聞いてもわからないといい、どこから通ってきていたのか、どの大学を志望していたのかなど話したこともない、というのだった。その連中自身、自分の志望なんてありやしないし、志望があっても、いっとう気が変わるかわかりやしない、といいだす始末だった。

君にとつて、週二回予備校に通うということは、嫌がおうもなく、四十三歳という自分を現実の事象の上に釘づけにさせることでもあった。地下鉄のスピード、繁華街のざわめき、しゃれた街並、数々のショーウインドウとその色どりの鮮やかさ。街行く人々、とりわけ女性の華やいだ化粧と服装は、二十年の間に押し込めてしまった心をいくらか融解させるには十分であったが、あの一閃の光のうちに閉じ込めてしまったあの日の部屋の風景とは、まるで糸の結びようがないのだった。

君は教壇で、かつてのアジ口調を真似て授業を進めてみた。生徒たちは、最初なにかのジョークだと思つたらしく、一斉に君を見て笑い転げた。だが、君の口調が一度目の笑いの波が去つたあとも止まず、内容もジョークではないと知つた彼らは苦笑し、すかさず大仰なジェスチャアで、オエーという信号を送り返してきた。

ケイが、ジュンの学校に呼び出された。呼び出されるのは、いまに始まつたことではない。三度目か四度目だ。

ケイは勤め先の病院から戻ってくると、消毒液の匂いの上に香水をたっぷりふりかけた奇妙な匂いをまき散らし、そばかすの頬を思いきり膨らませて出ていった。頭のうちどころが悪かつたら、子供にも遺伝してしまうのかねえ、というかなり危険なことばを吐きながら。

窃盗常習の五十男を捕まえてみると、持ち物の中にジュンのヌード写真が混じっていたという。中学校以来これまで、万引き、置き引き、恐喝などで度々補導されたことはあるが、ヌード写真とは初耳だった。学校では、補導委員会が、他にも同類の学生が出るのではないかと、鳩首会談を始めたらしい。

しかし、ケイとジュンは意外に早く、さばさばした顔で戻ってきた。縁起直しに、途中で中華料理を食べてきたという。それでもジュンは、チッキショー、なんでもあたいたと決めつけやがる、と膨れっ面になる。

違う、と初めからいつてるじゃないか。ちっとも似てやしないし、あたい黒子なんかないからね。そんなに疑うならほらつて、学長やサツのアホどもの前で胸をおっ広げてやった。学長のヤツ、目を白黒させながら、そのくせあたいのここをじつと覗き込んでるんだからね。とんでもない助平爺だよ、あいつら。

どうやら、写真の胸のあたりについていた黒子の有無で決着をみたらしい。ケイの方はひどく落ち着いていて、結局半日損しちまつたじゃないか。本当に人騒がせだよお前は、とジュンに劣らないすべすべした肌の胸を広げて、普段着に着替えている。

君は女たち二人の会話を黙って聞きながら、彼女たちが吐いたり吸ったりする息は、君一人の分の数倍にもなると思う。吐いたり吸ったりする息の量が多いということは、間違いなく生命力が強いということだ。

もともと女というものは、しぶとく長く生きる才能を生まれながらに身につけているものらしい。だから、こういうときでも、まず胃の腑を満たし、いましがた費やしたカロリーをすぐに補ってしま

う。あたい、学校いくの趣味じゃないよ、とジュンがいう。じゃ、辞めて美容師の修業でもするか、とケイだ。美容師い、ふん、あたいはそんなガラじゃないよ。もつとどおーんと、派手に稼ぎたいね。むしゃくしゃするんだ。なんというかなあ、澱んでるんだ、なにもかも。

ジュンは、くわえ煙草のままという。爪には緑のマニキュアだ。高く組んだ脚の奥には、はちきれそうなもの白さがある。

したいようにするがいいさ。ケイは無表情のままだ。ケイは鏡台に向かい、髪を梳いている。長くて豊かな髪だ。ケイは、髪を梳き終わるところもち首を傾げ、あたしもしたいことをした。その結果がこうなのさ、といった。

ケイは、鏡の中の自分の目をしばらく見詰め、唇の端にふっと笑いを浮かべると鏡から離れ、立って水道の蛇口をひねった。

君は、自分もしたいことをしてきたのだったろうか、と思った。



そのようでもあるし、と考えたあたりで気持が萎えた。

君は、君自身であることから何度か脱出しようとした。君が、君自身であることに耐えきれなくなつたときだ。だが君は、またすぐに君の部屋に戻ってきた。君自身を苛んでも、隣れんでも、ケイやジュンからどんなにいてよくあしらわれても、結局どうにもならない。

つまり、どうもがいてもあがいても、放たれてしまった時間の道筋を泳ぎ戻することはできないのだ。

二十年―地球は七千三百五回自転し、太陽のまわりを二十回公転した。この間、数十億の人が死に、それよりいくらか多めの数十億人が生まれた。そして、光は二十光年、すなわち百八十九兆キロメートルを一気に駆け抜けていった。

この場合の光のことばは、〈悲〉という。

贈り物が届いた。君の両親からだ。真新しい背広が三着に、ネクタイが十本、靴が五足に、手提げカバンという具合だ。君が予備校に職を得たことは両親には黙っていたから、勤め始めて二月目の贈り物だ。

これまでも、両親はケイを通じて度々援助をしてきたふうであるが、君は確かめたこともない。

贈り物が届いた翌日、二人はケイの留守に訪ねてきた。やっと人様に顔を合わせることができると母親が涙ぐんだ。君は、人様に顔を合わせられるのは、君が手に仕事をもつたからなのだろうか、それとも仕事をもつことができるほどに何かが快復したということだろうか、と考える。

しかし、君自身にとつては何も変わっていない。これまでのある時期に特に気分がすぐれなかつたというわけでもない。予備校に職を得たということは、君がひよんなことから〈君〉を演じる羽目に陥つたように、全くの偶然からなのだ。

君が頬杖を突いていつも眺めている風景の一角に、一年ほど前からビニールシートで蔽われた建物が現れた。君はその建物が好きだつた。というのは、夕日が沈むにつれ、ビニールシートがオレンジ色に染まり、建物の影が細長く伸び、やがてうす墨をはいた空に、宙吊りの形でぶら下がってしまうのだった。そのあやうい均衡が、なんともいえず君をゾクツとさせた。

透き通るほどに晴れあがつた日の朝、ビニールシートが除かれ、中からオレンジ色の建物の全容があばかれた。屋上には、M予備校という、これもまたオレンジ色の看板を冠して。

M予備校、ということばには覚えがあつた。

〈伝統と実績を誇る業界最大手M予備校、当地に開校。春季講座生徒募集開始。講師若干名急募〉

という折り込み広告を二、三度見たことがある。

探してみると、広告はある。君は震える指で、このアパートに住みついて以来、初めて自分の意志でダイヤルを回した。

面接では、大学中退という学歴の方は問題にはならなかったが、二十年の空白というのが相手の首をひねらせた。まだ三十代半ばかと思わせる相手は、首をひねったまましばらく考えをめぐらせていたが、鉛筆で頭を一つ叩くと、じゃ二十年間、あなたは司法試験の勉強でもしていたのですかと訊いた。

君はすかさず、そうだと口にした。相手は、怪訝な表情でもう一度君の目を覗き込むと、書類になにかを簡単に記した。

とにかく相手のことばにうなずきさえすれば、このオレンジ色の建物に通つてくることができるのだ、と考えた。

背広の一着を畳に広げたまま母親は泣き、父親は君の肩を叩き、なにもいわずに何度もうなずいた。君はその間、削りかけの五本の鉛筆を丁寧に研ぎ、膝頭にとまった藪蚊を一発でしとめた。

予備校の講師になったといっても、週の五日は以前と変わらない。机に原稿用紙を広げ、研いだ鉛筆を手元において、じつと西の空を眺めている。が、そのうちに机の上に突っ伏し、涎を垂らして寝入ってしまう。目覚めるとちようど昼食どきで、おもむろに席を立つと、隣の部屋の卓袱台にケイがこしらえていった昼飯をゆっくり食う。

そして、君は考える。講師になったのだから、今度こそ原稿をものにすることができるとしめたもので、いつか自分も、街の日差しの中を大手を振って歩けるようになるかもしれない。そんな新しい気持ちになる。新しい気持ちになって、鉛筆を握ってみる。心なしか鉛筆を握る手が軽やかで、どんなに複雑なストーリーであろうとすらすら生み出せそうな気がしてくる。

だが、そのうちに胃の腑の方からじわじわ眠気が攻め寄せ、鉛筆を握りしめたままの格好で、こらえきれずに眠気に寄り切られてしまう。そうして二度目に目覚める頃、ドアに夕刊が投げ込まれる。

夕刊は文化欄が豊富で、君は特に文芸欄の書評や同人誌評を丹念に読む。二十年前、ここに一度自分の名前が載ったことがあるからだ。君は、再び登場する日のために、現在の傾向や世相を調べるのをおこたらない。そして、新しい作品の構想を練る。それは、時間と、空間と、人類の消長を描いた壮大なドラマだ。

しかし、まだ機が熟していない。原稿のマス目を埋め始めるには、もう少し対象を的確にとらえなければならぬし、発表するには、

世の中が逼塞する時期を待たねばならない。より多くの共感を得たためでもあるし、そのためには、最もふさわしい時期を選ぶ必要があるからだ。

だから、いま君は安心して夕刊を隅から隅まで読んでいる。必要な箇所は切り抜きにもするし、他愛のない記事でもなにかの着想に役立つかもしれないと思い、丁寧に活字を追う。

ジュンがすり寄ってきた。あいかわらず空を見上げてポカンとしているのねえ。よくも、首がねじ曲がらないことねえ。と、ねばりつくような口調だ。そして、君の背中でなにかを数える気配がして、ねえお小遣いあげようか、と喉を鳴らした。君はあいかわらず黙って空を眺めていると、肩口から一万円札が三枚舞いおりた。

君があわてて振り向くと、そこにはケイによく似たそばかすの多いジュンの顔が間近にあった。どう、驚いた。

ジュンの緑色のマニキュアの間には、まだ数枚の札がはさまれていた。それを無造作に畳にこぼした。ジュンの目はどこか眠たげだった。甘い洋菓子と同じスパイスの、濃い化粧の匂いが君の鼻の奥をくすぐった。

変な目で見ないでよお。ジュンは、少し口を尖らせた。嫌らしいお金なんかじゃないよ。ちやんとマジにバイトして、稼いできたんじゃないか。なんだよ、その目は。そういい、小さなあくびを一つした。

ジュンは、柱を背に片膝をたてて座り、煙草を吸っている。緑色のマニキュアが、吸口の細い外国煙草をワイン色のすぼめた唇にけだるそうに運び、すぼめた唇から青い煙が切れ切れに吐かれる。煙はいく分尖ったジュンの頬にそつてのろのろとあがり、天井のあたりでうすい雲になる。

あたいて合わないんだよ、学校。でも、お金稼ぐことならわりと才能あると思う。さんざん遊んでるくせに、マジな顔して学校いつてる子、結構たくさんいるだろ。あたいたい嫌だな。こ汚ねえよ。遊んでるときの自分と、マジな顔して学校いつてるときの自分。あたいは一人じゃこなせっこないよ。

やっぱり、おふくろには頭あがらないな。おふくろの体の中にはすごい力のバネがあつて、どんなにピンチなときだって、必ずプラスにいいくるめてしまふ。あれは、そこらの要領や、付け焼刃だけじゃないな。敵わないよ、あたいたい。

君は、ジュンがケイのことで、悪口でないことをいうのを初めて聞いた。普段は、ジュンとケイの話といたら、くたばれ、死んじまえ、なのだ。この似た者同士の生き物は、どうしてこう、いつも揆き合わないと気が済まないのかとあきれくるくらいだ。

小遣いもらったって使い道ないよ。

君は、ジュンに三枚の札をさし出した。なにさ、ひとがせつかくあげるつてのに、気分こわすじゃない。あたいだって、たまに気の効いたこと、やってみたいんだ。それともやっぱりこのお金、疑つてるのかい。

ジュンはすぼめた唇を突き出し、まだ長いままの煙草をもみ消しながらいった。そして、畳にこぼした札をゆつくり拾いあげ、君がさし出した札を手荒に奪いとると、あんたにまで馬鹿にされちまっちゃや、やきがまわっちゃうよ。と舌打ちしながら、玄関の戸を蹴たてて出ていった。

君にとつて、ジュンが誰に似ていようがいるまいが、どうでもいいことだ。ジュンはケイの子であり、ケイの子であるということとは、君の子であるのだ。

だから、この場合の光のことばは〈怒〉である。

できてしまったことはしかたがないし、とケイは落ち着いている。結局、あの子はあんならなとおさまらなかつたのよ。命が助かつたつてことが、幸せなのかどうかわからないけど。

ジュンは、男のオートバイでラリッている最中にでもなく、酔いどれてアパートに帰る途中にでもなく、明け方の国道を一人で歩いていて、居眠り運転の自動車にはねられたのだ。

現場は見通しのよい直線道路で、事故が起きることなど考えられもしない、美しいポプラ並木の続いているところだった。自動車はポプラの木の本に体当たりをし、ボンネットをゆがめてしまったが、運転手はかすり傷一つ負っていない。

不幸だったのは、むしろ運転手の方だったのかもしれない。酒気帯びでもなく、もちろん無免許でもない。妻が急病だというので、赴任先から大急ぎで帰る途中だった。普段から運転には十分注意しているのに、現場近くのことには全く記憶にないんです。と、まだ若い運転手は、青ざめた顔で頭を抱え込んでいた。

自動車はポプラの木にぶつかった衝撃で、運転手は覚醒し、あわててハンドルを右に切りブレーキを踏んだことが引き金となって、車体は一回転し、ちょうどすぐ傍の歩道を通りかかったジュンをはねた、という。

ジュンの左腕が動かない。複雑骨折のため、神経のいたるところが切れて、手の施しようがなかったという。

緑色のマニキュアをして、札片を君の肩口に投げ入れたあの腕である。細巻きの煙草をワインカラーの唇に運び、君のさし出す三枚の札をひったくって出ていったあの腕である。

痛いよお、痛いよお、とジュンはそばかすの浮いた血の気のない顔をゆがめ、動く方の右腕で君の袖を引き千切った。目尻から涙を滴らせ、ガリガリ歯を噛み鳴らし、君の胸を殴りつけた。

そのとき、君のどこかに電気が走った。こんな乱暴な力で自分を打ちつけてくれるものがある、ということに初めて気付いた。それは剥出しの暴力であり、憎悪のままの報復であるのかもしれない。たが。

君はケイを見た。ケイはタオルをしぼり、ジュンの額の汗を拭いていた。それは手慣れた動作だった。体からは、いつもの消毒液の匂いを立ちのぼらせていた。君は、ケイの表情をうかがった。が、ケイはやつぱりうすい靄の向こうにいて、そばかすの浮いた顔で、ジュンの泣き声を表情も変えずに聞いている。

予備校を半月休んだ。ジュンの事故のためである。

半月経った朝、君は地下鉄に乗り、繁華街を抜けて、オレンジ色の建物に着いた。そこは、カラフルなシャツの群れが醸す体臭で蒸れていて、君は久しぶりに華やいだ気分になった。

君は事務室を通って講師室に入ろうとした。そのとき、みんなの目が君に注がれた。怪訝そうな目の色だ。君は、てつきり半月間の休暇のせいだと思った。そのまま事務室を通り抜けようとする、事務長がなにかを目くばせし、大急ぎで追いかけてきた。

事務長は講師室に入ろうとする君を呼びとめ、懇慫に校長室に誘った。校長はいなかった。事務長は、しばらくここでお待ちください。という、部屋を出ていった。

君は、青いカーペットの敷きつめられた校長室に一人になった。部屋は明るく広く、ソファは吸い込まれそうなほど柔らかかった。じっとしていると、そのまま眠り込んでしまいそうだった。

校長はこなかった。十分が経ち、予鈴が鳴り、すぐに一時限目のチャイムが鳴った。君は立ちあがりかけた。しかし、またソファに腰を下ろした。そうしているうち、三十分が経ち、一時間が経った。

君は目を閉じた。が、講師である君は、眠ることは許されないのだ。が、そのうちふいに、自分はなぜ〈君〉であるのだろうかという疑問が湧いてきた。

―音のない稲妻が、袈裟掛けに闇を裂いた。黄緑色のそれは、飛沫をあげ、流れ、地に墜ちていく。

五本、六本と、たて続けに稲妻が闇を走る。

議論に飽いたぼくたちは、二本目のボトルに手を伸ばした。君が実家から持ち出した黒ラベルだ。

明かりがないってのも、悪くないな。狭い部屋が、際限もない宇宙空間みたいに広がっていくのがよくわかるよ。

君は、上機嫌である。二DKの二間を明け放して、つい先刻まで君はT派の連中と、大詰めに来たサークル室をめぐる大学当局との折衝について、激論を展開していた。

木造のサークル室の取り壊しは、いまとなつてはやむなしとして、新サークル室の管理を当局の手に握らせないことが最後の生命線だ。当局は、新サークル室が、再びアジト化することを恐れている。T派に、H派に、G派。これらが絶対相容れないことを利用し、自治会派として存続するための援護射撃をするという条件で、G派を丸抱えのスパイとして雇いあげた。

H派には、飴と鞭だ。やつらがお題目のように唱えてきた、生協食堂の改修工事の青写真をちらつかせ、やじろべえの一方に座らせようとしている。やつらが、当局の膝下に屈するのは時間の問題だ。となると、俺たちT派だ。俺たちには失うものはなにもない。俺たちの前には、さらなる革命戦線の構築と、鉄の団結による前進しかない。こうなると、無期限ストをうって出、バリケードを完全強固な砦とし、当局や、G派や、H派を相手に徹底坑戦を挑むのだ。

君の軒昂としたアジ調の演説が、小一時間前まで部屋を席捲していた。ひとしきり雨足が強くなり、稲妻が走り、幾度目かに光が走ったとき、部屋の明かりが消え、それを期にT派の連中が引きあげなかつたら、君の冗舌は果てもなく続いていたに違いない。

ぼくは、T派や、君の持論に組するなものも持ちあわせていないが、君たちの座の端にいることを誰も咎めはしなかつた。

そんな具合であるから、ぼくには君たちがなにを気色ばんでいるのか、なにを尊大ぶっているのか、殆ど理解できなかつた。どころか、君たちが稲妻の光に洗われる度に、あの有史以前に死滅し尽くしたという、アンモナイトやシーラカンスが、再び水底から暴き出されるのを見るおもちで、ただ眺めているのだった。

君は酔っていた。稲妻が部屋の中を暴き出していく度に君の半身が揺れ、君の長い髪の毛が紫色に発光した。

ぼくも酔っていた。君の髪が紫色に発光するのを、オーロラみたいだ、といった。君がオーロラみたいに揺らぐとき、ぼくには、君のうしろの部屋が、果てしもなく芒の生えた原野に見えるのだった。

君の部屋は、もともと君の剽軽な奇怪趣味で装われているのだったが、ぼく自身の酔いも手伝ってか、いつになく縹渺とした雰囲気満たされていた。

西側の六畳間の角に座る君の背後には、果てしない原野が広がっている。その芒野の先端は遠く水平線に至っており、水平線の向こ

うには、落ちかかる夕日が厚い雲の隙間から二、三本の条光を發していた。

芒野のところどころに、鼻が顔の半分を占めるほどにひよる長い奇妙な人物の首や、羊でも馬でもない動物たちの首がはめ込まれ、いずれも水平線に向かつてうつろな視線を投げていた。

海底には、三葉虫や硬骨魚といった、いまはすでに死に絶えてしまった筈の魚介類たちが、高くそびえ立つ昆布や、名も知らない海草の間に群れをなし、あるいは水を引き千切るほどの力強さで泳ぎめぐっていた。

一際激しい稲妻が、夥しい光の束を降らせて去った。

すると、果てしない原野と見えていたものが、幾重にも砂の波がうねる砂漠へと変わった。その気の遠くなるほどうねり続く砂の波の中に、なにかの動物のものであるうしやれこうべが一つ、半ば砂に埋もれ、無念そうな眼窩を空に向け、開いていた。

視線をさらに遠くに伸ばすと、殆ど原型をとどめないほどに朽ち落ちたピラミッドと、顔の表情を失うほどに朽ちたスフィックスがあつて、まつわりつく砂風に、わずかに残る白い脚部を晒していた。

質の悪い逆三角形 $\gamma$ が、背後から攻め寄せてくる。すると、三角形 $\alpha$ も、三角形 $\beta$ も、強大な三角形 $X$ の影に潜むため、蜘蛛の子を散らすがごとくに逃げまどう。これだよ、これ。笑わせるじゃないか。どいつもこいつも、しょせん己れがかわいいというだけのね。

君は、ボトルの中身をぼくのコップに注ぎながら、闇の底の君の頬を愉快そうに弛ませた――

フツと君が我に返ったとき、校長が入ってきた。続いて事務長も入ってきた。

腕時計を覗くと、一時間四十分が経っていた。校長は笑いながら近づいてきて、君の前にゆっくり腰を下ろした。事務長は、校長のうしろの席に少し前かがみに座った。

実は、と校長はいった。そういいかけて内ポケットを探ると、煙草ケースをとり出し、君に勧めた。君は、自分は煙草はやらないのだという。校長は軽くうなずいて一本に火を点け、目を細めて煙を吸い込んだ。そして、事務長から白い封筒を受けると、それを目の前に差し出した。

君は、一時間四十六分目に校長室を出た。君の足はカーペットにすくわれ一度つまずきそうになり、部屋を出たところのリノリウムで今度はすべって、あやうく尻餅をつきそうになった。君は、事務室の中は背中をそらせて歩き、事務室を出るとカバンをダラリと

下げて歩いた。

君の頭の中に、退院してきたばかりのジュンの顔があった。化粧を落としたジュンの顔は、まぎれもなく君の顔ではなかった。

君が出てくるとき、ジュンは動かない左腕を布団に包み隠し、小さな寝息をたてていた。君はしばらくジュンの寝顔を見詰め、音のしないよう静かにドアを閉め、出てきたのだった。

校長の話は簡単だった。試用期間ということを採用したものの、学園の方針にふさわしくないもので、契約を解除するというのだった。その最初の通告は、一か月前に済ませている、ともいった。君にとつてはその話は初耳で、そういう通告を受けた覚えなど全然ないのだったが、校長は白い封筒を君に握らせ、満足そうに笑った。

君は繁華街を抜け、路地に入り、枝道を折れ、国道に出た。そして、ひどく埃の舞いあがる歩道を、ふらつきながら歩いた。

君の目には、君を飲み込む勢いで向かってくる自動車のフロントガラスの光が、いく重にも重なりあいさざめきあう万華鏡みたいに、妖しくきらめき、波うつて見えた。

君の足は、弟の消えた海辺に向かっていた。君の体はどこかがひきつり、靴にも、ズボンにも、シャツにも土埃がこびりついて、ひどく重たかった。

青みどろの海は、とろりと静まっていた。海面のすぐ近くまで迫った急カーブでは、自動車がエンジンやブレーキの音をきしませ、うなりをあげて往來しているのだったが、海面はまるで別世界だった。音を、埃を、さまざまな色を、人の命までも吸収し、渾然と同化してしまう作用を、奥深くに秘めているかのようだった。

青みどろの中心付近には、一条の飛行機雲が中点をさしてのぼっているのだったが、その起点のあたりは深すぎる青の中に揺らぎ、すでに同化の作用に染まりつつあった。

君は国道を折れ、海からの風を背に草道を歩いた。草道には、柔らかな草の伸びた野原が広がり、名も知らない白や紫の花が咲いていた。大きく伸びをし、汗を拭き、そして塩辛い味のする唾を一口飲み込んだ。

君は、ケイたちに書き置きもせず、ぼくの田舎に戻ってきた。田舎に戻るといつても、なにしろ二十年ぶりのことであるから、汽車やバスの乗り場をいちいち確かめながら、やっとたどり着いた。

二十年前には、かろうじて雨露をしのげるほどの加減で建っていたぼくの家もいまはなく、それと思われる地には牛が三頭昼寝をしていた。であるから、墓地への入口もまるで見当がつかなかった。

どこか見覚えのある一本の銀杏に気付かなかつたら、君は目的を



果たすことなく、ちょうど通りかかった一時間に一本という帰りのバスにとび乗っていたかもしれない。

牛の頭が、君の侵入にやおら立ちあがりかけるのを尻目に、銀杏の葉の下をくぐって崖道にとりつき、ようやく海の見渡せるこの地までのぼってきた。

君は意を決すると、草の中に足を踏み入れ、カバンを振り回してあたりの草を薙ぎ払い、蔦を引き千切った。手や腕を鋭い草の針が刺し、君の侵入に驚いていったん舞いあがった藪蚊が、一斉に羽音をたてて下りてきた。

目の下に、見覚えのあるみかげ石の蓋があった。胸が鳴り、舌がからみつきそうなほど、喉の奥がヒリついた。君は力を込めて、みかげ石をずらした。蓋はなんなく開いた。みかげ石の底には、二十年の間にいく分黒ずみ、苔むした〈ぼく〉の骨壺が、あのときのままにあった。

君は、じつと骨壺を見下ろした。君の脳裏に、あの日のことがまざまざと蘇ってきた。部屋の中央に血を嘔きながら転がっていた、君とぼく。

あのとき、君は君であり、ぼくはまだぼく自身だった。

君は、〈ぼく〉の骨壺に手を伸ばした。抱きあげようとしたのだ。抱きあげて、君の部屋に連れ帰ろうとした。

しかし、君の耳元でささやくものがあつた。

――少々退屈だけれど、こうやって気ままに暮らすつてのも、結構楽しいもんだ。

かすかな声だった。続いて、ゴホッと喉を鳴らす音が聞こえ、誰かの躰みたいなき音が混じった。

君の頭に、二十年前の君の部屋で見た、殆ど原型をとどめないほどに朽ち落ちたピラミッドと、顔の表情を失うほどに朽ちたまま寄り添って立つスフィンクスのことが浮かんだ。

そうかもしれない、と君はつぶやいた。

君は、いま一度〈ぼく〉の骨壺に目を凝らし、静かに蓋を閉じた。決してこの世の光に触れることはないだろう、二十二歳と七か月と十六日のままに。

(了)